
真・恋姫＋無双 現代若人の歩み、佇み

Duegion

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 現代若人の歩み、佇み

【Nコード】

N5962X

【作者名】

Duegion

【あらすじ】

老若男女いずれもが苦しみ、耐えて、強く生きていった三国時代。王道と霸道がぶつかり合い、大地を血と鉄で染め上げた時代に、二人の若き日本人がいた。

片割れは、悪しきを許さず、その手に握る刀から溢れる光は、大陸奥深くの南蛮の地まで輝やかせたといわれる、王道を敷く者、北郷一刀。

もう片方は、悪しきを許容し、冷えた血と鉄で民草を蹴り、その心には遥か高くそびえる山々を飲み干す悪意を持つといわれた、

辰野仁ノ助。

二人の若人はいかにして、乙女達の戦乱に足を踏み入れ、いかにして世を変えていったのか。

今、ゆるやかに群雄割拠の世が始まっていく。

序章：去る日のこと（前書き）

此度、はじめて「小説を読もう」に小説を投稿させていただきました、

Duegionと申します。真・恋姫十無双シリーズとそのキャラクターを通じて、

皆様方にごこの作品を楽しんでいただけたら、これに過ぎたる喜びが御座いません。

なにぶん非才な初心者ではありますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

序章：去る日のこと

自称・大陸一の占い師、管輅の耳の傍を甲高い群集の喧騒の音が走っていく。

昼間の通りは客を引き寄せ、客寄せ店員の朗らかな猫なで声が耳を響き、

「わが店の商品は、これぞまさに天下一の名品なり」、

「世に多くの品あれど、わが商品に勝るものなし」と、

あたり障りの良い文句で顔の蔭をたたえる商人らが客の注意を引こうと努めている。

道行く者に憧憬か嫉妬かあるいはひっそりと隠した憎悪の目を向けるのは、

財布すら持てぬ貧民であり、上着や脚絆（きやはん）が破けてほつれ手足が細く弱った乞食であり、

自らの野心と獣欲をひたと隠す夜盗崩れのゴロツキである。

それら全てに無関心を決め込み、

通りの間の細い路地でただ只管（ひたすら）に月琴を抱えて頂垂れるのがこの老人だ。

背筋が曲がり、目元のしわは何重にも苦勞を抱え込み、

僅かにあけられた口からは表の通りを行く人々からは決してもれな
い、

世の真実を知ったことに対する深い感動と、

自分を長らく生きながらえさせた自然に対する深い畏敬の念が僅かにこぼれ出た。

見事に白く染め上がった長髪の一つつが、通り抜けていく静かな風でゆらめく。

「これはいつたい、なんの奇遇であるか。」

老人の苦勞のしわが一本消え去った。

「長らく死に損なつた老骨めが新たに知ることの、なんとも面白きことよ」

僅かに頭を上げた老人の目が静かに開き、

その老齡とは信じがたいほどの目のきらめきが湛えられている。通りを歩く者々はそれだけを見るのならば、

決してこの目が六十を超えた老骨のものだとは夢にも思つまい。それほどきらめきが管輅の目からこぼれ出ている。

口元が釣り上がり、瘦せた頬から骨がわずかばかりに浮き出た。

「『天の御遣い』とはなあ……。それも二人とはなあ。」

目がさらに輝き、開いた口元からは萎びれた舌が見える。

言葉の語尾にて枯れた声が裏返り、路地に溢れる邪氣と吹き抜ける風をさらに強めた。

背を預けている古ぼけて汚れた商店の木壁までもがそれを彩った。

「これはきつと、我が生涯最高の遊びに違いあるまいて。うかうかしていられなくなつてきたわ。」

珂々々と喉の奥から愉快的な声が漏れ出し、抱えていた琴をひしと抱きしめ、

若人がするかのような軽い動きでこの老人も立ち上がった。

眼球に広がるのは、表のゴロツキどもとは比較にならぬ強い邪氣と新たな玩具が手に入ったかのように嬉しく舞う稚児のような喜心であつた。

通りの雑踏と喧騒には目もくれず、細い路地へと体の方向を変えて歩いていく。

長い髪が風にゆらめき、さながら幽鬼を作り上げていくかのように老人の背を押していき、路地の暗闇が老人の心を知ってかしらさずか、さらに闇を増していった。

後に『双つの御遣い』とされる噂は、悪意なき管輅の遊び心を通じて大陸を駆け抜けていく。

「一つは流星と共に、一つは戦乱と共に世へ降り立ち、この大陸を猛き者の国とするであろう」。

その片割れの名は、北郷一刀。世を憂い、天に王道を敷く者の助けとなる者。

もう片方の名は、まだ知れぬ。ただ知るのは、強き武と賢き知にて大地を赤く染め上げる、覇者であること、ただ一事。

序章…去る日のこと（後書き）

管輅は今回のシリーズでは左慈らとは絡ませず、オリキャラとして、ちよくちよくと出していく予定であります。

というか、小説本文を書き上げるだけで2時間もかかるとは…。
舐めてかかると本当に先が思いやられます。
それでも、ゆっくりと書き上げていきます。

第一章：大地を見渡すこと その壱

空はいつぺんの曇りなく青色に澄み渡っており、この日差しの下で寝転がるには丁度よいほどの気温である。痩せた大地を広く見渡せる小高い丘の上には一本の樹木が大地を震わすかのように、見事にその巨体をみせている。時より吹かれる順風は樹木の枝を揺らし、ザアザアと木を煽っている。

頭をうんうんと唸らせる者がこの地を一度見たら、その唸りを即座にやめて、西周時代の詩経の『風』を編んでいった、一流の詩人になれるかのような気持ちをさせるだろう。

その優雅で雄大な風景には似合わぬ、風がシュツと切られる音が、一定の間隔をおいて続けられている。

それを生むのは一振りの刀だ。片刃で歪曲したつくりをしており、刃の所々には血痕が染付いた痕だろうか拭いようのない穢れが見えている。

刃の先端、刀尖（とうせん）は僅かばかりに欠けており次に人を殺すときには難儀をしそうである。

刀の柄、刀柄（とうへい）を強く握って一心不乱に素振りをする者の額には汗が光り、時々毀（こぼ）れる気合維持のために発せられる鋭い呼吸は、この者の十全足るやる気と、刀を振り続けることに対する少しばかりの疲労を如実に物語っている。

「……………ウツ……………」

刀柄を握る者の服装は、上は数箇所のほつれを直され、大地の煙を吸い込んで茶色が全体を薄く彩り、それでもなお元々の色である青色を残した古びれた服。下は男の細くがっしりとした体に似合うような黒を基調とした大きさの脚絆（きゃはん）で、こちらも数箇所

のほつれが直されており、男の生活に対する生真面目さが現れている。腰には紐帯が巻かれ、結ばれたところより広がる二本の紐と紐帯に括り付けられた小さな袋が、男のしっかした刃を振る動きにあわせて、ひらりひらりと踊り、足を踏みしめ前へ後ろへ体を動かすと共に、踏み直される大地からは土煙が僅かばかりに男の足をなでる。

「ッ
..... フウ..... あああ、疲れたあ。」

その動態からは微塵も似合わない、やる気が一切欠けたため息が男の口から面倒だといわんばかりに毀（こぼ）れ出た。先ほどの動きでもう疲れ果てたというが如く、どさつと地に尻を降ろして樹木の方へ背を預けていく。手にもった刃は手が届くところに突き立てられて、地に刺さったときに割れた土からは煙が風下へ消えていった。地の近くに置かれた手荷物一（中には二・三日分の非常食、水筒、衣料を破いてできた包帯の代わり、金銭、何品かの小物の武器があるが、その出番はまだないようだ。）が、大地を這う風を物ともせず地に横たわっている。その荷物はしっかりと口を結ばれており、簡単に素性を吐くことはなさそうだ。天に面倒臭そうな表情をした顔を向けた男のそれとは裏腹に、意思の強さが見て取れる力強い目が天の先を見つめている。短く切り揃えられた短髪が風に煽られるたびに、男の表情は和やかなものとなっているが、瞳が揺らぐことはまったくない。

人と比べれば十人中六人は男の容姿をみて快男と評し、後の四人のうち三人は唯のヘタレと評し、残りの一人は冷淡と評する。相容れぬ評価ではあるが、その何れもが男が内に抱いた心の造りを端的に表しているとよいだろう。面倒くさそうな演技を貼り付けて背を木に預け、見つめる先に何を捉えているのか誰にも知れない、そんな表情をする男が辰野仁ノ助である。

この大陸ではこの名前とは別の名が、市民や賊の間で知れ渡っている。いついかなるときも、例え周囲を腕っ節で名を言わせた盗賊に包囲されていても、例え無銭飲食で捕まって店の主人に殺意のこもった目で睨まれようと、妙に自信有り気な態度とそれをしつかりと支える武技と小細工で、行く先々で問題と解決と、何よりも人々の呆れと感嘆を生じさせる。すなわち『遊びの仁』。そんな行為を続けざまに起こしていくのがこの男である。「阿呆と罵られようがそんな罵倒は最初からなかったかのように次の瞬間には口笛を吹いている」とも言われるが、男の気丈さと生真面目さ、人の期待に応える誠実さと、何よりも武技や道具を選ばぬ武人としての強さがこの名をただの遊び人で留まらせていない。いざとなれば手段を問わず目的達成のために穢れ役を進んで受け入れていく、現実に対する冷ややかで強かな行動が賊の頭を悩ませ、新入りの賊はその名を聞けば、「背筋が寒くなる」と恐れている。

そんな噂も印象も今この男が出している間抜けな表情と比べれば、本当にこの男がああ『遊びの仁』かと疑いたくなくなってしまう。先ほどまで天の先を見つめていた瞳は既に安定せず、頭はこっくりこっくりと垂れ始めている。ようは眠いのである。『遊びの仁』は風の中を遊んだ子供のように、疲れ始めたらずくに眠気を出す悪癖を、ここでも出している。ついには頭が完全に垂れて、煽られる風が気持ちよいといわんばかりに健やかな寝息を立て始めた。体が木から離れて横倒しとなったその時、紐帯に括り付けられた小袋が解けられて、地に転がって中から小さく畳まれた紙が出てきた。樹木を震わす強い風が吹いた瞬間、小さな紙が大地を離れて宙へ舞い、男の寝息も枝木のささやきも届かぬ場所へと飛んでいく。

紙がひらりひらりと舞っていき、畳まれた紙が風に舞うたびに広がっていく。

やがて完全に一枚の紙となり、文面が見えるまでになった。

そこには短くこう記されていた。

『蒼天已死黄天當立歳在甲子天下大吉』

「蒼天すでに死す、黄天當に立つべし、歳は甲子にあつて、天下は大吉なり」

張角に煽られて飢えた貧民がついには野党となつて漢王朝を激震せしめ、

後の群雄割拠の時代の到来に大きく貢献した、いわゆる黄巾の乱がもうまもなく始まるその頃、

寢息を立てるこの男はそんなことなど関係ないとただ惰眠を貪っている。

「寝すぎた……………の、かな」

当たり前である。既に三刻一（約6時間）も過ぎて、天の赤い光が西に傾き始め大地を斜めに輪切りにしている。空に移る青は未だ残っているが、それでも色が変わり始めている。そんな時間まで馬鹿眠りをしていた男は、割かし焦って近くの町へと足を早めて向かわせていた。寝る前まで使っていたぼろぼろの刀は鞘に収められて紐帯に収められており、男の素性を確りと物語る手荷物は男の俊足の邪魔をしないように力強く背負われている。走るリズムは変わらずに、朧（おぼろ）に地の先に見え始めた町を見定めると、心に静かに安心を湛えた。

時は後漢王朝の末期の時代。外威と宦官による横領から始まる政治腐敗は、大陸の中心である洛陽に留まらず、全土へとまるで火事のように広がっていった。僅か12の齡で帝となった靈帝を支えんがために、皇帝の母やそれに近い者が皇帝の代わりに政治を司った。しかし彼女らははつきりいってこれは不得手としており、さらには朝廷の金蔵は前の皇帝らによる浪費によって金欠が生じる有様。そこで彼女らは自らの信頼を預けるにたる人物、すなわち家族や親族に助けを求めた。彼らは『外威』となつて政治を行おうとした。しかし彼らも職業柄から政治が不得手であり、彼らも同時に助けを求めることとなる。

そして外威は、宮中に入るために男の象徴を切断した野心家達、すなわち『宦官』に救いの手を求めた。これこそが致命的な誤りであったとは彼らは思つまい。

そもそも宦官は後宮の世話をすることが仕事であるために、終身雇用を許された身であり、年とともに発言力が増して周囲に頼られて

いくが同時に野心と権力欲と尊大な自尊心を培ってきた。そんな折に外威から救いの手を伸べられた彼らにとつては、「これぞ天恵！」とも思つたであろう。実質的には外威を上回る権力を持つ彼らは、自らの獸欲と自尊心を満たすために（または金欠政治を是正するために）贈賄政治を始めた。贈らぬものは投獄・左遷の身となり、贈つたものもまた次の贈り物を用意するうちに宦官の欲に飲まれていき、最後には宦官と瓜二つの性格を持つ悪人が蔓延（はびこ）っていく。中にはこれを批判する勇氣ある者たちがおり宦官抹殺計画を密かに練っていたのだが、これの露呈によつて全員処刑の身となつた。

これを見た地方の政治家も、税金として民衆から金銭やそれに値するものを奪うような政治を始めていく。中には宦官に贈り物を捧げ、出世を取り付けるものさえいた。民衆は日々困窮する生活に対し強い悲哀を覚えたであろう。だがそんなの関係ねえともいうかのように、洛陽では宦官を中心に贅沢三昧を楽しんでいた。困窮に耐えかねた民衆の中から、生きるために盜賊となつて、血をすすり肉を満たす者も当然の如く生まれる。そしてその盜賊を初めとした悪鬼羅刹・外道畜生の襲撃によつて死する者も悲しむものも当然生まれる。それが漢王朝の末期。辰野仁ノ助が今生きている世界である。

（日暮れまで時間はあるが、宿をとらないと野宿となる。ぶつちやけ無理。）

最近は何そのものを開くことすら出来ぬ者も増えている。明日の食事、果ては今日の食事もありつけぬ者も出始めている。飢えて死する事ほど、惨めで理不尽なことはない。彼はその点、磨き上げた武技と妙技で金を稼げるといふ、傭兵まがいのこと続けて生き続けた。彼らのようにならないよう、自分の心を墮落させないように、

常に自分に言い聞かせそれを実践する。『遊びの仁』の心は、大陸の民衆と同じように逼迫したものとなっていた。徐々に近づき始める町を見て、胸の中の安心感がさらに広がる。町に着いたら、手荷物の中にある金銭をはたいて食事を買ひ、今日も生きてこられたことに対する感謝を胸に食事と酒にありつこう。

「……………舌に転がる肉からはしっかりと染み込んだ出汁がきいており、食事に飽きをもたらさない。喉に渴きを覚えたら、酒を啣（あお）り口の中に残る脂身と共に嚙下（えんげ）する。そしてまた、食されることを望んでいるかのように自らをアピールする色とりどりの食菜をみて、満たしかけた空腹感をもう一度取り戻す。握った箸が僅かに振るえ、皿に残る肉へとまた伸びていく。嗚呼、これぞまさに桃源郷なり。さらば空腹……………」

「……………ウへへへ……………へへッ……………ハッ!?」

トリップしかけた頭を振るい、口からこぼれている涎（よだれ）を拭う。宦官どもには味わえぬ満足感を期待するうちに、口がにやついてしまった。されど致し方なし。日々生きることには全力を注ぐ者にとつて、食事と酒ほど気が緩み、この世の天国を体現するものがない。食事の前の空腹は満たされぬうちが幸福であることを、彼は酒と共に知ったのである。にやつく口をそのままにウへへと馬鹿さを毀れだし、まだ見ぬ町へ足を早めた彼を責める者は誰一人としていない。だがにやつきながら、しかも走る馬にも追いつきそうな速さで大地を駆ける彼を見たら、きつとそれはよからぬことを企む変態にしか見えないであろう。

その時、彼の後方から焦っているかのように鞭を打たれる馬の嘶（いなな）きが聞こえた。商人であろうか？否、それならもっと日が

高いうちに町に入るだろう。口が緩みつぱなしのまま仁ノ助は足を遅くし、後方を見遣る。馬の音がするほうに小さく見える一つの影が現れていた。完全に足を止めた彼は目を細めてその先を見定める。馬に鞭を打っているのは、なにか煌（きら）びやかな服を着た人だ。鞭を打つペースは通常のそれよりも速く、その者自身の疲れが出ているのであろうか、時折ペースが乱れているのが分かってきた。

（……いやな予感がする。ああいう場合は得てしてその後ろを尾けられているんだが。）

口の緩みはとうに消え去り、眼光は鋭く光って馬の方向をみつめている。眉間のしわが寄せられて、彼の周りの空気が徐々に重たいものと成っている。体の向きは町から馬へと変わり、紐帯にさした刀がジャキンと鳴る。いやの予感がすると自然と緊張することが、彼の命を長きに渡り続かせている。やがて馬に乗った者の姿形がはつきりとする前に、馬の後方から一頭のものだけとは思えない土煙が沸いて出た。先に行く煌びやかな服を着た者を追うかのように、そしてそれを捕まえるかのようにだんだんと現れ、次第には数頭の馬が見て取れた。太陽の光に反射している、なにか細長いものを持っている。それを馬に当たらぬように横に地面と平行になるように広げ、前行く者を執拗に追いつめていく。

（賊か！）

そう思うやすぐに手荷物を地に捨てて馬の方へ走っていく。齒は舌をかまないように噛み締められており、短髪は体が風を切る音と共に揺らめいている。刀の鏢に指をかけて走るさまは板についたもの。鞞の先に足をぶつけることなく、先ほど以上の速さで駆ける彼の姿は先ほどの間抜けさを地の果てへ放り投げだしているかのようである。

辰野仁ノ助は、この出来事を以って、戦乱の波へ飛び込んでいくことになるとは、彼自身は露とも思っていない。そしてこの馬に乗る者も、この一事をもって、己の人生を一変させることとなるうとは、予想だにしなかった。

第一章：大地を見渡すこと その壺（後書き）

この話には書いていませんが、ほかにも後漢王朝が衰退した原因として、

旱魃・疫病・飢饉といった天変地異がありました。

いわゆる、現代の言葉で言うところの食糧危機です。

勝手ながら思ったこととしては、この時代は民衆にとっては救世主のいない「北斗の拳」に思えたんでしょうね。世紀末を様相を呈する世相となつたら、新興宗教にすがり付いて救いを求めてしまうのは昔からのようです。これが、黄布族が爆発的に広まった大きな理由の一つといえるでしょう。

次回は軽い戦闘シーンを入れる予定ですが、いささか描写に不安があります。時代劇を見て読んで勉強いたします。

第一章：大地を見渡すこと その貳

地を走る足の数はゆうに十を超えているのであろうか、不規則にみえて規則的なりズムで音が駆けていく。

一歩一歩がしつかりと大地を踏み鳴らしているのがよく分かるほどである。

その足の持ち主はさぞ強い足腰を持っていることであろう。それもそのはず、駆け抜けていくのは馬ではあるが、しかしその外観は良馬と比べれば痩せ細った印象を受ける。

今日の食にありつけないのは馬も人も同じということが、目も落ち窪んでいるのが痩せた外観をさらに哀れなものとしている。

「オイクソアマア！！てめえ止まれやゴラアツ！！」

「早く走らんかい、テメエラ！！上玉逃がすんじゃねえ！」

馬の一生など気にもかけぬ悪劣で下品な欲を口から吐き出しているのは、

どれもこれも悪玉がそのまま似合いそうな風体をした男共だ。

無精ひげが乱暴に生えた口からは罵詈雑言と共に唾が飛び交い、己の服にそれがついたり、走り去ってきた後ろの大地へと流れて消える。

髪は何十日も水で洗わず放置していたのか、遠目からみても汚らわしい色をしており、

黄色の頭巾で結わかれた髪の間からはしらみが生まれているように思われる。

ボロボロになった服は悪臭を放ち、

薄汚れた黄色が全体に広がっている服と相俟あしまって、

さらに男達を汚らわしくしている。

彼らの手には鈍く光る銀色の鉄、

何人もの生き血を啜った刀が男達の数だけ日の光を反射している。その数は4つ。いずれも手入れのかけらもされていない、使い捨ての刀のようだ（少なくとも男達はそう思って使用している）。

男達の目は爛々（らんらん）と輝き、獲物を前にした獣達の獰猛な光を抱いている。

その光は目の前を必死に駆ける一等の馬、正確には馬の手綱を握り締める一人の女性へと注がれている。

（迂闊だったわ……！もつと早くに町へ来るべきだった！）

内心の焦りを必死に押さえ込もうとするが、その努力が報われずに顔にそのまま焦りが出ており、それをさらに強調するかのように額の汗が何筋も顔を垂れている。汗は首筋にもじわりと出ており、

この時代の民には珍しい健康そうな色をした白い肌を濡らしている。肘ひじから先は元々服にないのであろう、

赤のラインが横一線に袖口を走っており、袖口から生えている両腕には若い女性特有のしなやかで、それでいて力強さが見え隠れしている。

服には所々に藍色と黄色の花柄が飾られており、白色が主体の上着を華やかなもとしている。

胸元には花を象かたどった力チューシャのようなものがつけられており、服を着る者の魅力をより一層高めている。

黒色の紐帯が巻かれており、脚絆きゃはんは赤の短パンとも思わせるかのようなものである。

膝小僧が見えるまでに短い脚絆は活発的な印象を見せ付けている。足には黒の靴を履いており、

馬の走りに継り付くかのように足を使って馬の腹を抱えこんで、振り落とされないように耐えている。

女性が握る手綱は何度も馬を打ちその走りを急かしているが、それでもなお町までの道程が遠くに思える。このまま愛馬が走り続けているのだろうか。それとも私が力尽きてしまうのだろうか。後ろの奴等に追いつかれたらどうなるのだろうか。想像だにしない屈辱と、この世を拒絶したくなるほどの絶望が襲ってくるのだろうか。

(・・・・・・・・・・・・・・・・駄目だ！弱気になっては駄目！)

自らの頭を過ぎる不吉な妄想を振り払って只管ひたすらに前を見つめるが、それでも目には不安が色濃く出て揺らめいている。まだまだ町までは遠い。

20里(約10000メートル、つまり1里=5000メートル)はあるのではなかるうか。

鈍ってきた頭でそう考える。気を引き締めなければ。

そんな思いを強め、手に持つ手綱をより強く握り締めた。

後ろに続く暴君共を振り払うために。

そんな折に、一つの人影が町がある向こう側からゆっくりと現れてきた。

(どうみたって女狙いの賊だな、ありや。)

全くの平野が延々と広がっている。

走りの邪魔をするような障害物(岩・坂・出っ張った丘陵)はほとんどない。

まだ距離は少しばかり遠いが、それでも己と馬の速さを考えれば近いともいえよう。

辰野仁ノ助は馬もかくやといわんばかりの俊足で、

遠くから見えてきた鈍い銀色の光を刃のそれと見定めて、このように思った。

風はやや追い風、

それ故に賊に追われている彼女のもとへ駆けつけることが早くなる
ことが、

彼にとって幸運となった。

刀柄には既に左手がかけられており、

走るたびにゆれないようにひしと押さえられている。

風と己の出す速さに揺れる紐はばたと音を立ててたなびいている。

見つめる先には既に追われている者の姿形がはつきりとし、

それに何かを思っ前にその後ろから迫る四本の銀色に目を奪われている。

太陽の光を西から受けて鈍色に光るそれは、

彼にとって何らかの武器と見定めるに十分であった。

それを裏付けることに四頭の馬を駆る男達の身なりがある。

遠目から分かるほどの年代物の使い古した服装。

女性のそれと比較して、すぐさまに賊と判断できてしまうほどの荒々しい馬遣い。

彼らにとってみても町のすぐ近くまで追う必要はなかったのである
う。

しかし自らが生きること考え欲求を満たすことを考えるあまり、

頭の回転が鈍くなっているのであろうか。

頭の回りが早いと話し合いによる解決が期待されてくるのだが、

こうとなつては話し合いにも応じるような状況ではない。

彼はそう断定して、四人のその頭に巻かれた黄色の布のことを聞き
出してから、

全員を叩き斬ることを決めた。

視界に映る女性の姿がはつきりとわかるほどに接近した。
女性との距離は既に三町（約330メートル）よって1町
メートル）を過ぎようとしている。 110

助けが来たのであろうか、
心なしか女性は手綱を打つペースが安定してきている。

これならば町に逃げて、救援を求めるまで体力は温存できるだろう。
距離はさらに縮まっていく。

二町、一町半、一町、半町。

女性の表情が捉えられた。

助けに来たことに対する安堵感、
そして一人で馬を駆る四人の賊をやれるのかと疑う不安がないませ
だ。

まあ見ている。男の心には不敵な自信が存在した。

最初の一撃をどのようにやるかで賊共の威勢を挫けるか、
彼は既にその方法を決めていた。

女性と馬を鼓舞するように彼は叫ぶ。

「そのまま町へ走れ!!!」

「おい……え!!!……じゃねえ!!!」

勢いを保って女性とすれ違う彼の前に四人の賊が見定められ、
前の方からなにやら叫び声が聞こえてきた。

察するに女を追う邪魔をするなということだろう。

ここで邪魔をされたら、
最早これ以上追うのは自らの命をいたづらに危険にさらすこととな
る。

町から出てきた兵士に取り囲まれ、しかもそれが五人以上だったら
俺達は終わりだ。

馬は元々馬屋から奪ってきた駄馬、兵士達が駆る馬と比べれば赤子同然。

獲物を捕らえることが実質的に不可能になりかけているに対する彼らの怒りは、

自分達に己の足で走りながら迫る生意気で憎たらしい男に向けられた。

元々歪んだ顔を顔を歪め、顔のしわ一本一本から汚らしい殺意がにじみ出ている。

刀を握る力がさらに籠められた。

仁ノ助はついに紐帯にさした刀を抜き左肩に担いだ。

賊の一人が我先にとこちら目掛けて疾走してくる。

手に持たれた刀は血の脂をそのままにしており、大きく振りかぶられた。

右からの袈裟懸けにする気であろう。

この世界には未だあぶみ鍙あぶみが発明されてないため、馬を駆るには足腰を中心とした筋肉が強靱であることが必至。

さらに刀を振るうとなればより強い筋力が必要となり、

馬を駆る者のバランス感覚も必要となる。

力がなくば、どんな馬すら暴れ馬となる。

その難度が高い馬術を出来るこの賊は見た目以上に自らを鍛え上げ、自らの武技によってこちらを殺す自信があるのである。

手に刀を持つ姿は中々に板についていた。

最初の賊との距離がさらに縮まる。

距離は四間（5・6メートル、つまり1町1・4メートル）。

双方から相手に向かって駆け寄っている距離なら一秒も満たずに接触する。

そのままさらに近づいた瞬間、賊の刀が鋭い音と共に振り落とされた。

馬の勢いも手伝って本来のそれよりもさらに早く下ろされているのが賊自身も分かった。

「ッオラア！」

「――男はなすすべもなく胸元を深く斬られ傷口から勢いよく血を吐き出す。胸元からは臓器と骨が見えるほどで助かりようがない。賊共はそれを放置して女の方へさらに足を速める。女はこちらを振り向きもしない。が、最後には追いつかれて自らの愛馬から振り落とされる。賊たちは馬もろとも確保し町から離れていく。そして誰も目のつかぬ場所で女をいただく。どのように陵辱しようか。悲鳴をあげて助けを求める女の服を無理やり脱がし破き、自らの暴君を慰めるために女の体を使う。健康そうな肌が地面に押さえつけられ、男共に乱暴にされるたびに徐々に赤くなり始める。上下の口は乱暴にされるたびに興奮してきた。どんなに否定しようとも女の体は男のそれを求めている。白い肌は汗と白い液体にまみれ、土の茶色がそれをさらに彩る。口からは隠し切れない興奮の吐息が走り、その中に女自身の淫靡な欲求が徐々に強く現れていく。そして最後には演技の悲鳴が完全に消え去り、懇願の言葉を出して自ら求めていく肌をすり合わせ自らの女をより強調し荒々しいそれに熱い視線を注いで求める姿に男達はさらに興奮し、より滾るたぎそれを女に押し付けあう。――」。

とまあ、賊の思い通りになるならこんな風になるのであるが、現実とは若干違った。

駆け寄る仁ノ助は馬と接触する寸前に勢いよく右に側に弾かれるように飛び、

さらに賊の刀の範囲から逃れる。

そして肩に担いだ刀で左から袈裟懸けに馬の左前足を切断する。

勢いを保ったまま前へつんのめる馬もろとも、

男は驚愕が混じった悲鳴と共に頭から地面に投げ出される。

それを気にも留めず二人目の賊に向かって仁ノ助は走っていく。

他の賊達は驚きの余り馬を駆る速さをゆるめてしまっている。ひよつとしたら今斬った馬に乗った奴がこいつらの頭、または一番の猛者か。

付け入る隙を与えた賊に乗じる形で二人目の賊に向かって勢いよく地を蹴って飛び掛る。

賊の驚愕の表情に恐怖の色が混じった。

「シャアッ！」

地を蹴って跳躍した仁ノ助は馬上に乗るように飛び掛り、乗っていた哀れな賊の胸に勢いよく刀を突き刺す。

勢いの余り刀は背中を突き破り血が噴出した。

賊が持つ刀を無理やり奪い取ると体を地面に蹴落とし三人目に向かって馬を走らせる。

どうもこの馬は前の主が気に入らなかつたらしく、新しく主が変わったことになんの拒絶もしなかった。

「ああ………こつち来るなアア！」

狙われた賊は悲鳴と共に逃げ出そうとするが、背中をさらしたその姿は刀を刺すのに十分すぎるくらいだった。

仁ノ助は手綱を使って馬を巧みに操り、

賊の馬に近づいていくと手に持った刀を逆手に持ち勢いよく真っ直ぐに投げた。

刀が使い捨ての道具に過ぎないのはこの男にとっても同意見であったようだ。

投げ出された刀は馬の尻に刺さり、不健康そうな黒が混じった赤の血が漏れ出す。

馬は痛みの余り横倒しに転倒していく。

男は悲鳴を挙げつつも手綱を放していない。

それが不運となり勢いよく横から地面に頭を打ち付けた男の頭蓋から、不吉な音が響いた。

男は一度痛みの悲鳴をあげるとピクリピクリと痙攣している。頭蓋だけではなく首も逝ったかもしれない。

仁ノ助は素早く自分の馬を倒れた馬に駆け寄せると、尻に刺さった刀の柄をがっしりと掴んで、

馬の肉もろともえいやと薙ぎ払うように抜いた。

そして最後の一人を左に見定めると馬を駆った。

「ひいい……うわああああ!!!」

最後の賊は蛇に睨まれたかのように体をぶるりと震わせると、やけくそまみれの悲鳴と共にこちらへ馬を駆ってきた。

仲間がわずかの時間で全滅したことに恐怖したのか、

あるいはもう逃げる気すらしなかったのか、

男は目の前の悪夢を是正するために勢いを止めない。両者共に刀を右に構えている。

馬上にて一撃必殺を狙った構えだ。

仁ノ助のそれとは違って、賊のそれはビクビクと小刻みに震えている。

恐怖に負けずに自らを鼓舞し構えを崩さない賊の心なんと健気なことか。

やがて二人の馬が勢いよく交差する。

顔を歪めた賊は交差する敵に向かって刀を力の限り思いっきり振るう。

(これで悪夢が消え去ったら、俺は実家に帰るんだ!!!もう賊なんていやだ!!!)

その願いを叶えるかのように仁ノ助の刀が男の刀よりもさらに早く振るわれた。

右胸あたりをざっくりと切り裂かれ、

男は赤い血を宙にばらまきながら前かがみとなり、ゆっくりと横に崩れていった。

賊の願いは自らの死でもって半ば実現することとなる。

それを実現した男は馬をゆっくりと止めていき、自らが起こした戦果を振り返った。

三人の賊はいずれも素人目でもわかるくらいの致命傷だ。あ

の失血量ではいちいち死を確認し、あるいは止めをさすまでもない。馬を二頭も殺してしまったことが唯一の失点だ。

町まで連れて行けば幾ばくかの金銭の代わりとなったであろうに。

仁ノ助はそこまで思うと、自らの不手際に失意の息を出そうとする。その直前に、初めに倒した賊の姿が目に映った。まだ動いている。

頭から地面に落とされたが無事のような。

手綱を手放してすばやく受身を取ったのであろう、

ゆっくりと立ち上がった賊は頭をぶんぶんと振っている。

それでも右腕は左肩あたりを押さえている。

顔は痛みと女が受けるはずだった屈辱を浮かべており、

こちらを殺意を込めて睨んでいる。

逃げようともしないのは男が乗る馬が二頭とも仁ノ助の方に居るからか、

または戦と共に培ってきた男の武の矜持のためか。

仁ノ助は後者の意を尊重し、

男まで七間（9・8メートル）の距離まで近づくと馬を降りて五歩近づいた。

「賊だな。」

「……だからなんだってんだ。今時珍しいもでもねえだろ。」

くだらない質問だという風に男は血が混じったつばを吐き捨てた。そして左に持った刀を右手に移し、下半身を静かに降ろし下段に構えた。

「……………殺る気か。ならその前に一つ尋ねたいことがある。」

「ああ？」

「貴様の髪を結わいている頭巾はどういう意味を持つ？」

「……………てめえが知ったことでなんの得があるかわかんねえが、
教えてもいいいぜ。」

仁ノ助の内心に、賊が自らの問いに答え得る情報を持っているという確信が出る前に、

賊は深く深呼吸をしさらに構えを力強くした。

体を右に開き左足を前へ一歩出して、右足は膝が曲る程度に後ろへ下がった。

左手は体の前に垂らされ、初めは下段に構えていた刀は肩の高さまで持ち上げられ、

切っ先は天に向かって斜め前に向いている。この男の意が如実に分かった。

すなわち、『俺を倒してから聞きやがれ』。

最後まで自らの勝利に向かって姿勢を崩さない賊に対し、
純粹に武人としての敬意が内心に広がる。

（賊の中にも矜持を持つものがいたとは。）

仁ノ助はそれに応えるために刀を構えた。

体の姿勢は男と同じ。体を右に開いて右足を後ろに引き、足を肩幅に開いた。

異なるのは刀の構え。賊の片手上段構えと違って、仁ノ助のそれは両手を使った下段構えである。

賊の刀が頭蓋に向かって振られる前に、逆袈裟懸けにもって体を右下から左上に斬ろうとの魂胆である。

両者は息を徐々に落ち着かせ、互いにお互いの心が読まれないしていく。

刀は一寸たりとも揺れず、姿勢は金剛神像の如く凜としたものとなっている。

視線がぶつかり互いの眼に映る自分を見定める。

戦意に満ちた空間は一種の隙を許さぬ緊張感を醸し出している。

油断をすれば相手の先手を許すことが手に取るようにわかる。

その結果は己の死だという事も。

空気が張り詰めいき、戦意と殺意が互いの間にて爆発しそうともなる瞬間、

地を勢いよく滑る風が吹いた。

「ッッ！！！！」

両者は弾かれるように前へ飛び出す。

握る刀はぶれず、ただ相手の心臓のみを食らわんと欲し輝く。

仁ノ助は戦意を、賊は殺意を噴出しながら駆け寄った。

空気が刃に切られる、次に切られるのはどちらかの体であろう。

距離が二間にもなり、刀の攻撃範囲に両者が飛び込んだ。

神速の如く振るわれた刀が互いの胸の奥の臓器に向かって交差された。

刀が振るわれた音が響き渡り、両者は一間半の距離を持って走りを止めた。

数瞬をおいたがまだ倒れない、しかし地面には赤い血が垂れている。どちらかが斬られ、臓を食い破られたのは必至である。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・アア」

口から血と息を毀れだすのは、はたして賊のほうであった。
仁ノ助持つ刀の刃からは血がべつとりと塗られている。

二人分の血を吸った刀は太陽の光を受けてさらに赤く光っている。
賊の胸は狙い通りに逆袈裟懸けに深く斬られており、
血が体を伝って地面にどろどろと流れ出している。

賊の最後の一刀は惜しくも仁ノ助のそれよりも遅かったのだ。
賊はゆっくりと膝をつき、

刀を持つ力が無くなったかカランと音を立てて刀が地に転がった。
上半身はそれでも地面に倒さないことに、賊の最期の意地が見せられて
いる。

仁ノ助はゆっくりと問う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・答えは？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・ちよう・・・・・・・・か・・・・・・・・く・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・さま・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は僅かに血を漏らして言葉をこぼし、俯うつむいた。

正座をするかのように足が畳まれている、
しかし地には頭を下げたが体は倒していない。

男の表情はよつれた髪によって窺い知る事ができないが、
口元は僅かに緩められている。

己の武威と信仰を伝えることに満足したのであろう、
矜持を持った賊はピクリとも動かない。

これにて賊の荒々しくも充実した生は終わったのである。

仁ノ助は刀を振るい血脂を払うと、賊のこぼした言葉を考え始める。
彼はちようかくといった。これは地名というよりも、奴の主人の名
ではないか？

ちようかく……ひよつとしたらこれは……。

「……つち……す！……く！！」

彼の思考を遮るかのように目の前から人影が複数見えてきた。

先頭を切るのはなぜか先ほどすれ違った女性だ。

後ろから馬を駆る追う兵士よりもさらに早くこちらへ愛馬を駆っている。

ここで仁ノ助はその答えを思いついた。彼らは自分の助けにきたのである。

兵士よりも真つ先に駆けてくる彼女の気丈さに思わず苦笑いが口元に現れてしまった。

『もしかしたらまだあの人が盗賊どもによって危険に晒されているのでは』

と女性の表情が張り詰められていたが、目の前に広がった惨状に思わず口を開いたまま固まってしまった。

この男は馬を駆った賊共を己の足だけで追いついてあまつさえ殺したのだ、

と思われてしまうのだから当たり前のことだ。

呆然としたまま動かぬ彼女を追い抜いた兵士達も同様の表情を浮かべている。

駆けつけるまでもまく賊共が殺されていたのだから、これもまた当然だ。

（さてと、どう説明するかねえ。困ったなあ。）

仁ノ助は苦笑いをそのままに、これからどう話していこうかと頭を悩ませて始めた。

赤い光が天と地を染め上げている。

それはあたかも、これからの彼らの行く末を物語っているかのよう

であつた。

第一章：大地を見渡すこと その式（後書き）

編集してどうしようもない矛盾を訂正しました。

（訂正前）刀もなしに二人の賊を斬り捨てるなんて、

仁ノ助君はすごいね！（棒） 大変失礼しました。

次回には仁君の第一号の嫁が参加します。

第一章：大地を見渡すこと その参

「信じられないわ……」

日の光は完全に西へ落ち、赤く光っていた空は今は星々と月の光によつて美しい輝きを放っている。

雲はゆるやかに流れ時折月の表情を隠すが、隠れていてもなお自らの神々しさを地上へ届けるようかのよう光る月は、

それはえにもいわれぬ美麗さを感じさせる。

それらの光を一身に受けるとある地上の町、

その町の一角の宿にて心を尽くされた料理に舌鼓を打つ者達が居た。赤い光の中で行われた男による賊狩り。

人の口には戸が立てられぬものであり、噂はすぐに町中に広まった。それが実際に行なわれたこと知つて町の者らは驚き、

さらに行つたものは若い青年とも思える風貌をした男だということに再度驚いた。

中にはそれが『遊びの仁』だということに驚きを隠せぬ者も居た（特に大陸の音をよく聞く商人たちや兵士たちがそうである）。

これをもてなすことは近頃落ち込み気味だった町を俄（にわ）かに活気だたせ、

なおかつこれを機に財布の紐を緩めるものがあるのかもしれない。

前者は主に町の者達が、後者は商人を中心としたものたちが互いの利害を一致させ、

この町の宿でも中の上の位置に値する場所にて宴会を開いたのである。

主役の仁ノ助は飲み食いが初日に限つて食事代・酒代・宿代がタダ、助演の女性は酒代・宿代のみタダということとで落ち着くことに、自分達の懐が寂しい民衆の金銭に対する熱い心が見えている。

そんな中で開かれた宴会には二人の予想を反して、一介の町人らが用意できるとは思わない中々に見事な料理が出てきた。

それを見た感想の一つが先ほどの台詞であることは、しっくりくるるところである。

「ハフツハフツ・・・信じられないわぁ・・・ズズツ・・・」
「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

再度女性の口から毀れだした同じ台詞に、仁ノ助と料理を作る主人は信じられないような目を向ける。よくよく考えればその台詞は正しいかもしれない。

仁ノ助はただ一人で馬中の敵の中へ飛び込んで、うち三人を馬上にて殺したのである。

その結果もさることながら、過程にいたってはまさに信じられないの一言に尽きる。

疾走する馬の足をすれ違いざまに斬り払い、迫ってくる馬上の敵へ跳躍して剣を突き刺し、

さらには馬同士で交差する瞬間にもう一人を殺す。

彼にとつては長年の経験から考えるの『たったこれだけのことであるが、

はつきりいつて無茶苦茶な所業である。

一般的な兵士はそもそも飛ばない。というよりも、馬上の敵と正面きって対峙することのほうがよっぽどおかしい。

何よりも賞賛されるべきなのは、怪我一つも負っていないということだ。

油断一瞬怪我一生ともいうように、僅かな怪我から死に至ることだつて十分にある。

特にこの時代は医療の発展があまりされてなく、

怪我や病を負えば現代でいうところの漢方を飲ませるのが普通だった。

もしも矢傷を負ってしまえば、それが原因で破傷風にかかってしまい死に至ることも、

この時代の医療レベルを考えれば一般的なことであった。

『経路』という目には見えないルートが全身をめぐって気や水や血の流れを司っている。

これが滞ることこそ、すなわち不健康の象徴なのである。

『中国医術の基本的考えは、悪いところを取り除くことや症状を抑えることではなく、身体のバランスと保つことである』という、陰陽五行論より発展された考えがここに現れている。

そんな中で無傷で戦いを切り抜けた男が居れば、さぞ信じがたいことであることは疑いようがない。

女性はうんうんと頷いて、目の前の食机に置かれたラーメンに自己の姿を認めた。

スープの表面はほどよく入り交ざったメンマが散らばり、

チャーシューはよく焼かれてスープに麺とよく絡むような肉脂を注いでいる。

主演の一つである麺は先ほど味わったところ、

スープの出汁をよく吸い込んでいるのが分かり、

一口二口を噛み締めるほどに口の中に言葉にいえない満足感を広げる。

チャーシューと共にかきこめば、肉の旨みが麺のこしと非常によくマッチし、

この世の天国を脳の中枢に思い描かせる。

噛めば噛むほどに旨みが広がる味わい、

これを知らぬ者ほど世で悲しいものはいない、彼女にそう思わせるほどに十分なくらいであった。

極み付けはもう一つの主演であるスープだ。

否、真の主役ともいうべきだろうか。

わざわざ貴重な鶏を卸して出汁をとり、葱やしょうがを入れてさらに独特の味わいを作る。

口腔に広がる暖かでこったり、それでいてキツくないスープ。

汁に浮かんだ刻み葱がスープの味を飽きさせることを許さない。

口に含めば誰もが必ずや目を見開くことであろう。

次いでその完璧な味に頬を緩ませることであろう。

女性もその類をもれず、スープをみつめて目尻と頬が緩んでいき、

昼間のそれとは全く相反するだらしない表情を作った。

「またこれを飲めることになるうとは、私は世界一の果報者であるに相違ない。」ともいうように、

女性はラーメンが入った器を手にする前に一瞬間を置き、

考え改めたか手に箸を握り締めた。

スープだけでは腹が満たない、合間合間に麺を食べることも忘れてはならない。

女性は新たな標的に目を光らせ、思わずつぶやいてしまう。

「信じられないわぁ……………」

「それはこっちの台詞だ！！！！」

弾かれるように仁ノ助は椅子から立ち上がって改心のつつこみを口に出す。

店の主人はうんうんと首を頷かしていることから、

つつこみたいことはこちらにとっても同じらしい。

女性は至上の喜びを味わう行為を邪魔をされたことに目をぱちくりとさせながら、

店主を見つめ次いで仁ノ助の方を見つめた。

数瞬ののち、頬が緩みが解かれて目には困惑の色を浮かべた。

「……………もしかして、麺が真の主役だった？」

「そこが聞きたいんじゃないんで、こつちがつつこみたいのはお前の食う量だ!!!」

思わず自らが食した料理の数々を脳裏に想起し、

それが盛られていた皿がタワーのように積み重なっていることを思い出し、

そちらへゆっくりと目をやった。

皿の数は種類を問わず大小含めて優に十五は下らないだろう。

積み重ねられたそれは見事なバランスを保って机に鎮座している。

自らの戦果を誇るかのように鼻を鳴らして、自信満々に再度仁ノ助を見た。

「こんなのまだまだ序の口よ。」

「頼むからそろそろやめてください。お願いします、詩花様^{シイファ}。」

先も説明したが、彼女の食事代は自腹である。

二人で食べている立場上、料金の請求先に自分も含まれていることは明らか。

もうこれ以上食べられたら生活必需品すら買えない。

椅子から立ち上がり頭を垂れて腰をほぼ90度に曲げる彼を見て、自信気に満ちた顔に苦笑いを浮かべる彼女の名は錐琳^{すいりん}、真名は詩花^{シイファ}という。

先ほどの戦いに感謝の意を伝えた彼女に対し、

「当然のことをしただけです。それよりも貴方が無事で何よりも良かった。」と返した仁ノ助に、

謙虚な心を見出した彼女はいたく感動し、

自らの真名をあっさりと言ったのである。

当然そのあまりに軽い動悸に驚いて受け取れないと断ったが、

斬り捨てた賊共の攻勢が馬鹿馬鹿しく思えるほどの熱意で迫られ、不承不承という感じに受け取ってしまった。

「この女は放っておくと行く先々で変事に巻き込まれそうだ」という、

この時確信した思いを彼は後年親友に打ち明けている。なんやかんやで食事を交えながら話をするうちに、口調から丁寧さが取れて地が出てくるまでに仲が良くなった二人は、店の主人から振舞われる料理に舌鼓を打っていたのである。

(にしても、近くで見ると遠くで見るとはぜんぜん違うな。)

頭を上げて椅子に座りなおす彼は、

またラーメンに視線を注いで目を輝かせ、

口のか端からよだれがこぼれんばかりににやつく彼女を再度しつかりと見つめる。

目元は柔らかな性格を携えるが如く作られており、

今デレデレとしている眉は平時のときでは穏やかなカーブを描き、戦時には凜とした目つきを支えることを彼は両方とも知っている。

目は大きく可愛らしい印象を十全に表し、

鼻立ちもよく整っており美しさを欠かすことをない。

赤い髪は全体的にショートカットに切られており、

ボーイッシュでありながら自らの可憐さを強調している。

町を歩けば十人中八人は彼女を見つめなおすであろう、

そんな優れた容姿の者の特権を持つ一人が彼女であった。

ラーメンをかき込む姿すら思わず可愛いとも思えてしまう自分に呆れながら、

仁ノ助は目を頭上にやって自分の財布の重みを思い出そうとしていた。

「んじゃ、今は一人旅の途中ってわけなんだ……。ふん、てつきり仕官先を探して大陸を歩き回っているかと思っただわ。」
「仕官は確かに考えているけど、それはまだまだ先の話だな。今は旅すから大陸の情報収集を中心としているよ。」

宴が終わって夜が更けて月の光が真上から差し込もうとするころに、二人は体験談を交えた昔話をして退屈を紛らわせていた。

二人は既に着心地の良い寝間着に着替えており（無論互いが着替えるところを見せても見ても見えない）、仁ノ助は詩花のその姿を見てスタイルのよさに目が奪われた。

世の男共が必ずその手に抱きたくなるであろう、特別大きくはないがそれでも豊かといえる胸に目がいつてしまう。

腹部と腰が鍛えられて引き締まっており、胸の大きさを控えめに強調している。

臀部（でんぶ）は肉付きがよく引き締まり、女性達がうらやむ色気を見事に出している。

普段着の活発さの印象が強かったために、寝台に横たわる彼女から発せられる大人の色気が逆に新鮮であり、豊満な肉体を意識しないように努めようとする。

彼にとつて不運なのは宿主の粹な計らいによつて同部屋となったことだ。

しかも大きめな寝台が一つだけである（詩花は無邪気に喜んでいた）。

「遊び人なら据え膳も食つちまえ」とニヤつきながら去っていった主人と、

彼女の秘密の色気を知らなかった自分に思わずいらつとしていた仁ノ助は、

自らの緊張を紛らわせるかのように自分の体験談を面白可笑しく語っている。

この男は遊びの何とかといわれている癖して、未だにCherry BOYな一面を持ち合わせている。そんな仁ノ助の助平な葛藤を全く知らず、詩花は男の話を表情を二転三転変えながら興味深く聞いている。男の生々しい戦いの経験を聞けば顔を顰（しか）めて、英雄もかくやといわんばかりの冒険譚を聞けばわくわくと続きをせがみ、食事代を払えずに皿洗いと店掃除をした情けない過去を聞けば間抜けな人だといわんばかりに腹を抱えて笑う。彼女との話は延々と続くかと思っただが一つの疑問が仁ノ助に湧いて出た。

「そっぴゃ話は俺ばっかりしてたな。次は詩花の話が聞きたい。」
自分ばかりの話では流石にネタも尽きてくる。
会話が途切れてしまえば後は寝るだけになってしまう。
それを避けるために、話す主体を入れ替えることにした。
突然昔話をする羽目となった詩花は、「あー・・・」と言いながら
気まずそうに頭を掻いている。
何やら彼女の虫にさわるようなことを言ってしまったらしい、
そう思っただ仁ノ助は若干慌てながら会話を続ける。

「あ、いや、別に無理に聞こうってわけじゃないんだ。ただ俺ばかり話すと飽き・・・の。」きて・・・え？」
言い訳に被せられた詩花の言葉に疑問符がついた言葉が漏れ出す。

「えっと・・・今なんて？」
「・・・出なの。」

言い直した彼女の頬が若干の羞恥心を帯びて赤くなる。目は仁ノ助を方を見つめようとせず右側を向いて泳いでいる。それでも完全に言葉を理解するには彼女の言葉は小さすぎた。改めて言ってもらおうともう一度願いを口に出す。

「今・・・なんて？」

「いいいいいい、家出なの！！！！！！！！！！」

完全に熟れた果実のように赤くなった顔を強調するように目を閉じた彼女は、

思わず部屋中に広がるように叫んでしまう。

羞恥心で心も頭もいっぱいいっぱいになり、

嗚呼嗚呼と訳の分からぬ言葉を口に出しながら枕に顔を埋（うず）め始める。

仁ノ助は二の言葉も継げず呆然としてしまう。

昼間、あんなに一生懸命だったのは家出が最終原因？

思わず肩の力が抜けてしまい、ため息が漏れそうになる。

しかし漏らしてしまったら最後、彼女にさらなる恥をかかせることになってしまう。

それは幾らなんでも酷な話となる、そう思い励ますような口調で話しかける。

しかし口に出してしまったのは励ましの言葉ではなく好奇心であった。

「・・・・・・・・・・訳を聞いてもいいかな？」

「・・・・・・・・・・あたしの家、小さい商家なの。」

彼女が枕に顔を埋めながら言葉をこぼす。

訳ありのようである思い出話を話してくれる勇氣に感謝の念が湧く。

「しょっちゅう金のことばかり考えて口に出す父上に苛立って、あ

る日家を飛び出して、それっきり町を転々として食いつないできたの。」

「……………うん。」

「……………でも何処に言っても寂しくて、やっぱり帰ろうかなって思ったの。んで、帰る前にもう一度自分の勇気を試そうかなって思ってた……………」

「あいつらに襲われた？」

「そう。」

深いため息が詩花の口から出される。事態は思ったよりも深刻だ。父上は確かに自らの家族のために働いているのである。

しかし彼女の目にはそれが人に媚びへつらって頭を下げる、情けなさとな甲斐なさに映ってしまった。

自分に目を向けるときには、愛情ではなく金を媒介にして見つめていた。

ありのままの自分が父親の目に映っていないかと思ってしまった彼女は、

嫌気がさしてこのような事を起こしたのである。

今更帰ることは彼女の思いを無駄にするようでもあるが、父親が彼女の行方を捜しているとしたらそれもまた心配である。

仁ノ助は思わずそう一方的に悩む。

自分が思っていることが決して他人が思っていることと同じではないが、しかし一度情報を他者と共有すると他人も同じ事を思っているかのような思考に陥りやすいのが人間だ。

彼はあえて言葉を口にせず彼女の独白を待った。

やがて彼女がまたため息と共に言葉をつむぐ。

「……………あいつらは初めはあたしが乗っていた金毘（きんび）、愛馬の名前）に目をつけて、次にあたしの体のほうに目をつけたの。

気持ち悪い顔でにやついてきて、怖くなって金毘を思い切り走らせ

て逃げたら追いかけてきて……」

「そして町につく手前ところで、俺と出会ったと。」

詩花はその時の賊の笑みを思い出すだけで不快なのであろう、不快感と怒りがない交ぜとなった雰囲気彼女から発せられる。

彼女にとっての幸運は賊どもが乗っていた馬は駄馬だということ、愛馬は足の速さは良馬と比べれば劣るが体力はそれ以上にあること、賊共のいづれもが騎射ができる腕前ではなかったこと、

そして賊共が彼女の追跡を中断する強い理由が存在したことだ。

もしもいづれ一つの理由が欠けていれば、

彼女の身の安全が危険にさらされる可能性が著しく上昇していたであらう。

この時代を生きるには実力以上に運も重要であることが如実にわかる。

先ほどまで部屋の中に存在した暖かな空気が沈黙によって床に沈溺する。

今空間を占めているのは気まずげな重い空気。

次に何を話したらいいかわからぬ仁ノ助は、

彼女に顔を見られていないことをいいことに、

顔をはつきりと曇らせて唸りながら新たな話草を探している。

対する詩花も自分の話が終わったことを沈黙によって意思表示している。

やがて彼は何も思いつかなかったのか、

不自然な口調で始まりながら話題を強引にを転換した。

「……そ、そういうえば、俺明日にでも買い物を買わせて、明後日の朝には町を出ようと思っっているんだ。」

「……」

「……ええっと、商人の人達に旅で得た小道具やら情報やらを売り買いしてな、衣服とか武器とかを新調するのが予定なんだ。」

身振り手振りおどおどしながら彼が話していく。
彼の歴史を振り返るに、ここ半年は洛陽からほぼ真東、
徐州刺史陶謙が治める地より西の方へと向かってゆっくりと歩みを
進めてきた。

途中途中の町村で日雇いの仕事や短期の荒事を中心に金稼ぎを行っ
ていき、
また人の依頼にしっかりと付き合ったりしながら時を重ねてきたの
だ。

このような拙速な行動をしてきたのは彼の知識にあるある出来事こ
とが思い当たったためでもある。

昨年の夏の終わり（旧暦6月）のころに、
日南郡南方諸国から使者が皇帝の下へと参上し、
洛陽にて饗応（きょうおう）がされたとのことが商人らから明らか
となったのだ。

覚えていることが未だ正確であれば、
あと一月もしないうちに太平道大方の地衣にある、
馬元義が中常侍の封？・徐奉らと内応するも教団内部からの密告で
事が露見し洛陽内で車裂きの刑に処されるはず。

同時に綿密な取り調べにより張角の道術を行っていた者千人以上が
処刑され、

さらに張角に対する拿捕命令が下され、
これに対して張角は予定していたより一月早い二月に決起をするの
だ。

この一連の動きによって遂に『黄巾の乱』が起こされて、
中原全土に戦禍が広がり次の重要な出来事である、
対董卓連合軍結成の下地が出来上がる。

自らがこの乱世の中心に飛び込む気は大して無いが、
それでも現代にまで伝わる三国時代の幕開け、

そして決して滅びない数々のドラマを生んできた英傑たちとの邂逅、
図らずともこの渦中に自分が参加できるまたとない機会であること
は明白である。

仁ノ助の内心は戦禍を憎む気持ちよりも、

それらに対する憧憬や好奇心を中心とした興奮が占めていた。

「もしかしたら自分が彼らのような大人物となるかもしれない、

はたまた彼らの下となって戦うことになるのも悪くは無い。

それ以上にこの時代を自分の力で生き抜きたい。」

これらのことが彼の脳裏を強く占められており、

彼が『遊びの仁』となるまでに活躍してきた最大の理由でもあった。

その彼の心を未だ知らずに枕に顔をうずめる詩花。

彼が自分の予定をあーだこーだいううちに、

彼女を覆う雰囲気から棘がとれてくるのが感じられた。

ひよっとしたら先ほどの不快感が消え去って、自分の話にまた耳を
傾けているのか。

（よし！これで大丈夫！）

彼は安堵感を胸に自らの話を続けようとするが、

その彼の健気な意思をなにかの健やかな息が挫いた。

不意を打たれたように口を動かそうとするのを止めて、首を傾げて
詩花の方を見る。

顔は枕にうずめることをようやくやめて横を向いている。

胸が健康であることを示すように呼吸音とともに上下に動いている。

自分の疲れを癒すために口から幸せそうな息が洩れる。

（あれ？）

頭にわいた疑問を解消するために寝台に横たわる彼女の表情を確か

めることを顔を覗き込む。

そしてそれを確かめると頭に片手を置いて思わずため息を出した。詩花は既に寝息を立てていたのだ。

安心しきって気持ち良さ気に眠る彼女を起こすような邪推な真似をする気は毛頭無かった。

色々な町を回ってきて路銀を稼いできても、今日のように暴漢達に命からがら追われる事は惹起してこようとしなかったのである。体の内にはぬぐいがたい疲労が鬱積し、それが今不快感とと共に吐き出されて眠気がきたのだ。

(まあ、別にいいか。)

疲れている体をゆっくりと休めることもまた喜びの一つである。

今は静かにして置いてあげよう。

そう思った仁ノ助は彼女が眠る姿を見て頬を緩める。

今日一日で驚くくらいに色々な姿を見てきた気がするが、

今の姿は案外彼女に一番似合っているのかもしれない

。何をするわけでもなく、ただぼおつと体を伸ばして羽を広げる姿。乱世に向かつて飛び込むには今少し時を過ごしてより成長する必要があるだろう。

彼女に風邪を引かないように布団をかけ直す。

少しも身じろぎしないことからぐっすりと眠っていることがわかる。そこまでのことをして、ふと肝心なことを思い出した。

(……食事代、明日払うことになっていたんだっけ……)

宴の食事代だけで既に彼の持ち合わせている金銭を軽くオーバーしている。

商人と売買行為を行ってもひよっとしたら足りないなんてこともあ

りうるかも。

思わぬ頭痛を覚えてしまった彼は恨めしげに詩花を見るが、自然と怒る気がしてこなかった。

むしろ彼女の今後の行動が心配につてきている。

目を僅かに覆う髪の毛を掻き揚げてやると、

彼女は少しみじろぎをした後に口元が僅かに和んだ。

よく眠るものだと感心しながら、彼は彼女に背を向ける形で寝台に横になった。

無防備に眠っている女性を襲う趣味は彼には無いが、

それでも自分の後ろに可憐とも美麗ともいえる女性がいることにドギマギとする。

今夜は熟睡するのに一苦労しそうだ。

月の黄色い光が部屋の中を煌かせる中で静かに寝息を立て、集中して眠る努力を始めた。

天下を襲う津波は未だ彼らを飲み込んではいない。

第一章：大地を見渡すこと その四

「……」仁君、そっちの箱持って。「はいよー。」
初めにこの古びれた蔵の中に入ったとき、中は埃と煤にまみれていた。

その中にある一つ一つの物が歴史を刻んだ後を残している。
遙か昔、およそ二千年前からのものすらこの中にあるはあるというのだから、緊張しないわけが無い。大学で東洋史を専攻する仁ノ助は、ただ三国志が好きただけの一般的な学生ではあったが、スポーツで鍛え上げたスリムで引き締まった体が老年の教授の目に偶然とまり、

助教授の人と共に荷物運びを手伝わされる羽目となったのだ。

助教授は役職の割には若く、

三十後半にもなるうかというのに年齢を感じさせない若々しさと砕けた態度が仁ノ助の緊張を解し、

教授がいけない時だけため口をきいても良いと気を利かせてくれた。

博物館の特別展覧会、「三国時代を語る秘宝」と銘打った展覧会は日本各地の歴史愛好家を中心として大いに繁盛し、

これの招致と周知に役を務めた老教授は鼻が高そうにしながら仕事内容を伝えた。

曰く、中国本土から持ってきたものは実は余り無いとの事。

曰く、日本各地にこれらの展示品を保管している場所があるとの事。

曰く、そのうちの数箇所は大学の近辺にあるが小物を多く扱っているから信頼できる人に運搬を任せたいとの事。

「よって、君は助教授と共にこれを手伝ってくれたまえ。君も好きなんだろう？」上機嫌に言う教授の言葉に乗り、

彼は自分の好奇心を十全に満たそうとしながら荷物運搬をし、
今最後の蔵の中で作業をしている。

ゆっくりと箱を積み上げられた箱の上に置く。

ここまでの作業は神経を磨り減らすような事が作業の割にはなく、体力は未だ残ったままである。

「おし……これでおしまい、と。手伝いありがとうね、仁君。」

「いえいえ、こつちも楽しませていただきました。」

互いの労をねぎらって笑顔を浮かべて言葉を述べる。

「んじゃ僕はトラックを返しに行くけど、君はどうする？ここからだ家には近いんでしょ？だったら

このまま帰ってもいいんだよ？」

「本当ですか？それじゃお言葉に甘えちゃおうかな。」

意外にももたらされた言葉に驚き、そ

して助教授の心遣いに甘える形でそれに応えた。

今日は久々に良い日となったなあ、明日から祝日を挟んだ三連休だしゆっくりしようかなあ。

彼は明日から始まる連休に胸を躍らせて蔵の外へと出る。

まだ時間は午後4時を回ったあたりである。

よく晴れた日差しは夕焼け前にも関わらず強く輝いている。

「あ、ちよつと待つて。」

助教授がトラックの運転席のドアに手をつけたときに、何か思い出したのか素早く蔵の脇に駆け寄って何かを探っている。

そして見つけたそれを両手で持って仁ノ助の方へ歩み寄った。

小さい年代物の木箱であり、B5サイズほどの大きさをしている。

「これなんですか？」

「教授がさあ、これどこから借りてきたのかわからないっていつて

さあ。んで片っ端から帳簿を調べただけど、これに関する情報がどこからも見つからなくてね。もしかしたら何か別の資料が紛れ込んだのかなって。」

そこまでいうと溜息交じりの言葉を紡ぎ始める。

「現地でもう一回帳簿調べながら作業して来いっていつて調べなおしたんだけど、やっぱりなくてね。完全に別物の資料みたい。」

「それで、どうするんですかこれ。」

「教授がいうに、探すまでに時間がかかりそうだからそれまではこちらが保管していてもいいだろうって。んでその管理を僕が担ったんだよね。」

「ほー……。んじゃ態々自分に向かってこれを差し出してるってことは？」

にやりと笑う助教授、悪戯を思いついた顔をしている。

「本当は絶対駄目だけどさ、この連休の間だけならこれ君に貸してもいいよ。」

「マジですか！？あ、あの、中身をみてもいいんですよね！？」

「どうぞどうぞ。ただし絶対に傷はつけないでよね。あ、ここで開けてもいいよ。」

その言葉に乗じて仁ノ助は自分の興奮を殺しながら慎重に箱のふたをあける。

中に入っていたのは、祭礼用のものであるうか、

額縁が儼かな印象をたたえている、一枚の鏡であった――――。

「ふあああ……………」

随分と懐かしい夢を見た。彼が最後に日本に居た日の出来事、

この大陸に足を踏み入れた最初の日の出来事であった。

(あの後自宅で鏡を持ちながら陶醉していたら、急に光に包まれてこの大陸にいたんだよな。)

まどろむ頭の中で若き日の自分を思い出す。

まだあの頃は全ての人間に一途な希望を抱いていたんだ。

裏切りをされてもすぐに許してしまうお人よしだったことが懐かしい。

徐々に眠気が醒めてきて視界がはつきりする。

一度眠りから醒めてしまうとすぐに眠気が雲散霧消する癖がついているのは、

二度寝している間に敵の刃にかかって死んだ友人を思い出したからだ。

痛みは無かったであろうが、

抵抗も出来ずに死んでしまったことがさぞ無念であったろう。

彼のようにならないためにこの癖を意識して作るうとした結果が今のそれだった。

まだ鶏が鳴く時間でもない。

思わぬくらい随分と朝早くに目が覚めてしまったらしい。

窓から差す光は部屋の中を夜明けの赤が僅かに色をつけている。

目の焦点を合わせて視覚になんら支障がないことを確認すると、

わずかに臭覚を刺激する甘い香りを認識してそれが漂う方向へ頭を向けた。

詩花がぐっすりとなぜか向かい合う形で眠っている。

ご丁寧なことに一見すると抱き合って眠っているかのようだ。

彼女の健やかな眠りは安寧をたたえており、まだ一刻は目覚めそうも無い。

早起きは三文の徳というが、

彼女の寝顔をしわが数えられるくらいに近くで見られることは三両の得といったところである。

口元が緩んで髪の毛を昨日の夜にやったようにゆっくりと掻き揚げ
てやる。

「役得、役得」と小さく呟きながら髪掻き揚げる男の心には
自分自身もわからない妙な胸の高まりが生まれ始めたことにまだ気
づいていない。

「おっし、これで準備万端っていったところね。」

「・・・・・・・・・・。」

刻はあれから五つ半ほど過ぎたあたりか。

一日かけた商品売買と情報売買は功を奏して、
必要な品を買っただけでもかなりのお釣りがもらえたのは僥倖であ
る。

これならこれまで控えてきた服の新調だつてできるかもしれない。
仁ノ助の懐にとって嬉しい出来事が立て続けにおきているのだが、
彼の表情から憂鬱な疲れの色が見え隠れしている

町の通りを歩いて町人達とすれ違う度に「噂の二人はこの者たちな
りや？」と、

興味津々な目で見つめられるのは若干肩がむずむじしてきて億劫（
おっくう）だ。

そうでなくも二人で買い物をする羽目になった経緯を思い出すこと
も頭を抱える要素となっている。

先ほどまで痛んでいた腹を押さえてこうなった原因が頭を過ぎるの
を彼はうんざりしながら思い出した。

.....

朝、あれから彼女が起きるまで窓の外をぼんやりと見つめていたら、いきなり腹の真上を強い衝撃が走り自分の体が寝台の外へ弾き飛ばされた。

鍛え抜かれた体でも突然の痛みを発する、「おおおお・・・」と唸りながら仁ノ助は寝台の上に拳を繰り出して膝立ちとなっている阿修羅の姿を垣間見た。

顔が赤くなっているそれは自らの武勇を誇っている。見事な正拳で男の体を吹き飛ばしたそれは拳だけなら天下を取れるのかもしれない。

ポーズを決めるように息を荒げて佇む姿は絵になって「なにしてんのあんた！！！！」・・・いなかった。

阿修羅と思われたそれは全くの別人であり、実際は寝起きの詩花である。

ただ寝起きという割には顔から眠気が白い湯気となってぶつとんでいる。

男に無防備な寝顔を見られたことを意識する前に、起きたらなぜか男の顔が目の前にあったことに思わず驚いたが故にこのような怒りの拳を繰り出したのであろう。

そしてその後、前者を意識して乙女の羞恥心を覚えたのである。顔の赤みは気恥ずかしさに頬を染め上げて、

耳も若干の恥ずかしさを覚えているのが彼女の短髪から見え隠れしている。

大きな胸が荒い息と共に上下し、先ほどの動きで寝間着が着崩れて服の間から胸の谷間と健康なへそが目に入る。

寝汗とは別の汗が胸の上の肌をつつと流れているのを凝視している

と、
彼女はそれを察して素早く両手で胸を抱いて隠す。

その姿が余計に色っぽく感じられて、男の息子がようやく欠伸をしながらもたげ始めた。

未だに大陸に来てから女性を味わっていないそれは目の前にある果实を前に我慢をする気など到底無かつたらしい。

仁ノ助が勃起し初めたそれを隠す前に、詩花は目敏くそれを見つけてしまった。

顔には別の意味の赤みが増してきており、

若干開けられた口からはどうしようもない怒りが毀れ始めている。

それを発するが如く彼女は寝台の上から飛び上がった、

地面に倒れて腹を押さえる仁ノ助に向かって見事な蹴りを繰り出した。きた。

「こんのお・・・色ボケエエエエ！！！！」

「イヤアアアアアア！！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「まあ、あれは仕方ないわよね。あんたも男だっということ完璧に忘れてたわ。」

「だからといって蹴りまでいれ・・・はい、いれますねごめんなさい。ですのでそれはやめて下さい。」

花のような可憐な笑顔で拳を構える詩花に仁ノ助は頭を下げて懇願する。

彼女は過ぎたことを煮え返す性はなかったのか、

笑顔たたえたまま拳を解いて彼の隣を歩く。

しかし彼にとつてはあれを過ぎたこととするにはまず痛覚を遮断することが前提である。

ズキズキと痛む腹は彼女が拳だけでなく蹴りにおいても日々研鑽していたことを否が応でも伝えてくる。

頭を上げて彼女を見遣りながら彼は歩みを止めずに話しかける。

「で、なんでついでくるの？」

今彼は明日の出立に備えて街中で買い物をする最中である。

本来なら彼女と一緒にいてくる必要も無いわけだが、

夜寝る間に予定を話してしまった手前、

一応ついてくる権利は彼女にもあるわけだが、念のためその訳をきいてみた。

「うーんと、あれから考えたのよねえ……………」

宙を見据えてあごに手をやって考える姿も中々にさまになっている。目を閉じて顔の笑みをそのままにしている。

「色々これからどうしようか考えたのよ。それで、『冒険譚の一つくらいなきや家に帰れない』って思ったの。」

「なんでそうなるの！普通真っ直ぐ家に帰ったりするでしょ！？」

「あたしはそう思わないの。んでね……………」

彼の突込みをあっさりと受け流して彼女は閉じた目を若干開けて見つめてきた。

悪戯めいた光が漏れ出しているのを察してイヤな予感が背筋を走る。

「あなたについていったら、正に渡りに船かなくなって考え付いたの。だからこれからよろしくね。」

「……………えー。」

半ば予想していたことが案の定その通りだったことにやっぱりといった気持ちとなる。

自分の買い物についてくる彼女はこれからの仁ノ助の旅に同行する気持ちで付き合っているのだ。

実家から飛び出して町を転々として、さらに見知らぬ男について旅を続ける。

正直彼にはそれが無謀なことだと思った。

これから先、先ず最初に彼がすることといえは黄布の乱に備えて十分な準備を整えて、

その後皇帝からの命を受けて戦に望む諸侯のうちいずれかの軍隊に志願することである。

そして彼はその志願先を既に見据えていた。

洛陽のすぐ東にある潁川えいせんにて歴史的な邂逅を果たす二人の王、劉備玄德と曹操猛徳である。

前者はまさに王道を行く者、正史では行く先々で狸つぶりを見せ付けて危険を察するとすぐさまに逃げ出して、最後には蜀を建国するまでに生きおおせる男である。

後者は覇道を行く者、正史・演技問わずその王才をどの場面でも発揮し、後世には彼は軍人・政治家・詩人として名高いほど。人間チート乙である。

全く相容れぬ天に愛された両者であるが、そうであるが故に天下三分のうち二分を担うのである。

彼らの元へ行くという事はすなわち、群雄割拠の世を生き抜くために戦乱を通じて血飛沫と断末魔が絶え間ない世界に足を踏み入れることである。

仁ノ助はある程度は可能かもしれないが、この女性にはどうみたって不可能である。

そう断じるも『彼女は「やっぱり帰ります」とはいかないだろう。』
という確信のもと、諦めつつも問うてみる。

「それを選んだ理由は？」

「いざとなったら守ってくれる人を、あんた以外知らないから。勿

論足を引つ張らないようにして、自分の身を守るように強くなるわよ！こうみえても武術には一応自信があるし！ただあの時はそれを持ってなかっただけで・・・」

「はいはい、分かりました。どうぞ私めに付いてきていただけますか、お嬢様。」

彼女の長つたらしい言い訳を聞く気にもなれず、

若干ノロケにも聞こえた理由を聞き流して諦めの境地で話し、買い物続けるために足を速めた。

詩花は一瞬立ち止まって、

自分の願いがあっさりと言った事に喜んで軽くその場で小躍りするようにステップを刻み、腕でガッツポーズを決める。

そして嬉しさをそのままに彼の隣に駆け寄って肘の下辺りを掴んだ。

「ほら！そうと決まればさっさと行くわよ！！」

「おい焦るな！！そっちじゃない！！」

駆け足に走る彼女にひきずられそうになりながら慌てて彼も足を合わせ、

間違つた道へ入ろうとする彼女を止めようと叫んだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

以下彼の奮闘をいくつか抜粋する。

「ねえねえ、この綺麗な宝石なに！？触ってもいい！？」

「お嬢様は御目が高くていらっしゃる。これはかの桓帝が側近の娘がご愛用申し上げられた由緒正しき宝玉でございます・・・」

「

「そうなの！？余計触りたくなるじゃない！！！」

「そんな豪華なもんがこんなとこに売ってるわけ無いだろ！！つか触るな！！いじるな！！！！！」

「この鞍いいなあ、金毘（詩花の愛馬）のためにこれ買ってもいいよね？」

「今の鞍だつて十分に良いものでしょうが。あれかなり精巧な木製のやつでしょ。なんで小さな商家のお前がもってるの？」

「家出するときに奪ってきちゃった。てへ」

「お前、実は人の恨みをかなり買うタチじゃないか・・・？」

「お腹減ったねえ、あの店の餃子おいしそうだなあ。あ、その店のラーメンもいい匂いがするなあ。あ！炒飯もまたいいパラパラ加減だあ。」

「YAMETE！！俺の財産の生命力はとくにゼロよ！！！！！」
「・・・ぜろつてなに？（注：この時代の中原には『ゼロ』という数的概念がありません）」

.....

痛かった。なにが痛かったって食費でございます。

仁ノ助の顔が痛みと裏腹に大して曇っていないのは、

午後の情報売買である程度路銀の稼げたからであろう。

後は最後に回る予定となっている鍛冶屋だけだ。

昨日の戦いでは既に使っていた刀は賊の体から抜けなくなっており、賊から奪った刀はいずれも鈍（なまく）らもいいところであった。

油脂はすっかり錆びた鉄にこびり付いていて実践には使い物にならなかったため、

刃をつぶして町の衛兵に寄付をした。

あれならば練習用の刀の代替わりとなるに十分であったのか、衛兵は使えるものはなんでも使うとばかりに快くそれをもらってくれた。

その後開かれた宴に酒が入る前に武器屋の敵つい親父がこちらに近寄って話しかけてきた。曰く、あんたに見合いそうな武器を数本持っているから暇があつたら取りにこい。

どのような武器が手に入るかわくわくとするべきなのだが、なにぶん出費が思ったより嵩（かさ）んでおり気がまいち乗ってこない。

詩花はそんな彼の憂鬱を吹き飛ばすようにわくわくと笑みをたたえながら機嫌よく歩いていく。

「武器かあ……………（チラツ）。あたしも一本欲しいなあ……………（チラツ）。」

「……………一本くらいなら買ってやるから、ちらちらしないの。」

「やった！その言葉信じるからね！！ん〜、出来るなら細剣が欲しいけどすぐ壊れそうだからなあ……………。持つんなら剣はやめて戟にしようかな……………。」

喜びながら自分が持つことになるまだ見ぬ武器に思いをはせる彼女を見て、

開き直つたのか憂鬱な表情は軽い溜息と共に宙へ消え去つた。

深く悩まずに現実を受け入れる彼の性格はポジティブシンキングともいってよいのか、または何事にも軽い男というべきなのか。

彼もまた自分に用意されているはずの武器達に思いをはせ、どのような物を持つとか思考をめぐらせている。

剣は既に刀にとってかわられて既に儀式用のものしか見られなくなっている。

双手剣は刀の形状によるが、不可能に近いがもし持てるならクレイ

モアに似た剣が持つてみたい。

刀は刀身が真っ直ぐな直刀が多いが刺すだけでは昨日のようになる、もし持てるなら反りがある呉鉤（ごこう）があればいいなあ。

あと短刀か投げナイフ。

鉞一（えつ、まさかり）は使いにくくて流石に無理だな。

そうこう考えているうちに目的の場所に着いた。

入り口からは中で何かを叩いている音が聞こえてきた。

鍛冶屋の主人が手薬煉（てぐすね）こまねいて自らの職を全うしているに違いない。

二人は互いを見つめ頷きあうと、いざ鍛冶屋の中へと入っていく。

外からの風が入ってくるのを気配で察した主人は、

手に持っていたハンマーに似た形状をしているとんかちに似たような物を置いてこちらを見ずに話しかける。

「機能の嬢ちゃんも一緒か、んじゃ早速見てくれや。俺は回りくどいのは嫌いなんでな。」

「助かります。では早速武器を見させていただきます。」

親父は仁ノ助の言葉にうんうんと返事をして、

奥にある部屋へと武器を取りに行った。

二人は早速どんな武器が出るか呟きあう。

「何だと思う？直刀は必ず出ると思うが。」

「あなたに似合うっていつてたじゃない。他の男共より背が高いし力もあるんだから、戟か槍じゃない？」

「まあ出来れば槍がいいな。お前はどつする？何か目ぼしい物があるか？」

「うん、もうちょい探してみるね。ありがと。」

「おい聞こえてるぜ。俺は地獄耳でもあるんだよ。」

奥から戻ってきた親父にギクリとし弁明の言葉を紡ごうとしたが、それを遮るように現れた親父が抱えている思いもよらなかつた武器に目を奪われる。

二振りの剣と一つの戟がそこにはあつた。

一つは彼が望んでいたがこの時代にあると思ひもしなかつた武器、クレイモア・・・の中原版であつた。

刃の切れ味と取りわしが良い機動性、

これを生かした攻撃『カット・アンド・スラスト』を使って16世紀前後から欧州の戦争で活躍した武器であり、

著名な使用者としてはスコットランドの英雄であるウィリアム・ウォーレスなどがある。

広刃でなんら彩色が施されていない無機質さを保っており、十字型の柄がとても印象的に目に映る。

この時代の人に合わせて作られたか、

柄を含めた長さは四尺五寸（135センチメートル）くらいで、一見すると重量は2キロくらいか。

しかしこれでも重量級の鎧を着た相手であつても十分だ。

これを持つて戦場に行けば猛者たちの目にもよく留まるであろう。

彼は満足そうに頭を頷かせると、妙なものをみるように二つ目の武器を見つめる。

片刃で反りが入つたそれは呉鉤ではあるが、なぜか形状が日本刀に似ている。

特に刃の刀の鐔が見事な文様を描いているがためにそう思つてしまふ。

だがこれはあくまで呉鉤である、故郷にあつた伝統ある人斬り包丁ではない。

彼はそう心を決めるとまずは擬似クレイモアを親父から受け取つて両手で握つた。

予想よりコンマ3キロは重かつたが、それでも誤差の範囲内ではあ

る。

彼は一度刀を振る意を二人に伝えて距離をとらせると、大きく深呼吸をして刃を振りかぶりそのまま軽く音を立てながら下ろす。

振れないことはないことがこの一振りでわかる。

両刃の剣を使うのは余り無かったが、

刃が1メートル近くもあるそれは十分な凶器となり、

同時に相対する敵に恐怖を与えるであろう。

親父の見事な仕事に感服して満足した彼は二つ目の刀を握ろうとし、三振り目の武器を持った詩花の姿を見つけて自分の行為を中断した。彼女が持っているのは典型的な戟であるが刃の裏側から生える二つ目の刃である戈（か）を見ると、戟というよりも鎌の印象を受けてしまう。

使いこなすまでに時間がかかる武器であることがすぐに分かった。

槍のように敵の体を刺して、それが外れた場合には戈でもって引手で掻き切ることを理想としている。詩花が持つそれは長さ七尺（

210センチメートル）ほどの長戟とされるものに分類し、金毘を

駆って戦場を掛けるにはうってつけの武器であった。

ただ彼には一つの懸念がある。

後に諸葛亮孔明によって実戦投入される槍にうってかわられ、その活躍の場を縮小していくことだ。

活躍の場が少なければ武器に対する需要が減少して、当然必要性も減るからこれを扱う職人が居なくなる。

これはあくまでも今の彼女には必要であつても、

未来の彼女には必ずしも必要なものではないだろう。

そんな思いを彼はいつかこれを想起する時のために心に残す。

彼女もまた武器を扱いたそうにしていたが、

武器屋の中はそれを振り回すには若干狭すぎていた。

詩花は残念そうな表情をして刃をみつめている。

「遊びの、実はまだ他にもおもしろいもんがあるんだが。」

そう呼びかけられた仁ノ助は、
クレイモアを壁に立てかけて親父の方を見る。

親父が手に抱えていたのは一つの木製の箱である。

こちらを見たのを認識すると親父は箱の中身をみせるように蓋を開ける。

中にあつたのは数本の短い刀であつた。

柄を含めて長さはわずか八寸（24センチメートル）もないのではないことから、専ら投擲（とうてき）用のナイフと解したほうがよさそうだ。

これもまたクレイモアと同様に特徴がない外観である。

だが暗器として扱うならば武器に特徴など関係はない、

むしろ無いほうがいざ暗殺に使ったときに面倒にならずに済みそう
だ。

思った以上の成果を得られて顔がにやける。

そんな彼を見て親父は自分の仕事が目立ったことを誇るように笑みを浮かべた。

刻は夜明けの一つ手前というべきか、

朝早くに出立して足を稼いでおくことを決めた二人は商人から譲ってもらった馬と金毬に乗って町の外へつながる門に向かつていた。

両者の鞍には必需品を入れた大きさ二尺ほどの袋が乗せられている。仁ノ助は昨日の買い物で購入した藍色の外套（がいとう）を青の上

着の上に着けている。

服の前面を閉じるような結び目が見当たらないことから、外見を意識して作られたものらしいことは明白であった。

しかし外套の中にはいくつもの手製の結び目があり、

この中に投げ刀が鞘に入った状態で手に届く位置に収められている。左の腰には新しく手に入れた双手剣を差し、

呉鉤は馬に乗せた鞍につけられて馬が動くたびに震えている。

詩花は自らの戟を左手で後ろに流すように持ち、右手で器用に手綱を操る。

やがて門前に差し掛かって衛兵に呼び止められる。

一昨日に使い捨ての刀を寄付した兵だ。

両者は馬を立ち止まらせて彼の方をみる。

「もういくのか。」

「ええ、長居ができぬ理由ができました故。」

「そうか、ならば引き止めんが、二人とも、くれぐれも気をつけろよ。特に最近は何やらきな臭い動きが続いているからな。」

「ご忠告痛み入ります。もし再びこの町に来ましたら、その時は共に盃を交わしましょう。」

「お世話になりました。またいずれお会いしましょう。」

「ああ、達者でな。元気でやれよ！」

衛兵と言葉を交わして有難いことに激励まで受けた二人は笑顔とともに別れの礼をする。金毘がぶると震えて嘶（いなな）き声を出した。

そして二日間世話になった町の外へと目を向けて馬を歩ませていく。門を過ぎようとするあたりで詩花から声がかかる。

「ねえ、折角だからあんたの馬を走らせてみない？」

「それって、競争しようっていうことか？」

彼の返しににやりと笑い、彼女は手綱を強く打って地の先へと駆けていく。仁ノ助はするいぞと叫びながら急いで自分の馬を走らせていく。その様子を門から見ていた衛兵が苦笑いで送っていった。人馬の体が風を切る度に、彼が纏った外套がゆらゆら音を立てている。

鞍にくくりつけた刀は馬の動きに合わせてるように、鞍に当たっては金属音を出している。

彼女は本気で走ろうとはしなかったのだろう、

五町（ 550メートル）ばかり馬を走らせて並走の形をとった。

彼女の方を見遣ると、今までの一人旅の孤独が吹き飛んだかのように清々しい笑みが顔に満ちていた。

仁ノ助はそれを一瞬見つめて再び前を見る。

中原の空は未だ平和をたたえているが、

その下の大地はすぐに血で赤く染まることだろう。

日の出の光を受けてまばゆく光り始める西の空に一羽の鳥が飛んでいくのがみえる。

そして彼は馬上からその下に広がる雄大な大地を見渡した。

これからの戦乱に対する不安と、群雄達の活躍を間近で見れる興奮が、

彼の胸のうちをとぐるが巻くようにならない交ぜとなっている。

第一章：大地を見渡すこと その四（後書き）

今回からタグにある通り、不定期更新の様相を呈してきます。
あらかじめご了承くださいませ。

また、第一章までごらにいただきました真に感謝申し上げます。
今後とも遅筆ながら努力させていただきます。

第二章：空に手を伸ばすこと その巻

二月の冬の寒さで凍える洛陽の市場、
その中心で四肢を縄で縛られながら甲高い喚き声を挙げる男がいた。
風体は野蠻そのものを表しており、
男の髪を結わく黄色の頭巾が出自を公然と語っている。
喚き叫ぶこの者の名は馬元義という。
朝廷内の欲まみれた宦官達と内応をし、
時がきたら皇帝の膝元であるこの町で決起を行い、
朝廷の腐敗を一気に武力で断じる手筈となっていた。

ところが彼の部下である唐周が皇帝直属の宦官にこの事を密告、結果として計画は露呈してしまい彼は拘束される。

「……以上の罪によってこの男を車裂きの刑に処する！！恐れ多くも皇帝陛下に反旗を翻そうとした、鬼畜所業を企む男の末路をしかと目に焼きつけよ！！！！」

彼の目の前に立つ役人が高々と宦官によって書かれた書状を読み上げた。

彼らの周りを何事かとみつめているのは、
いずれも飢えと貧しさを体の何処かしらに見せている住人達である。

宦官による腐敗政治が町を蔓延って以降、
日々自らの生活は困窮する一方をたどり、
それに加えて冬の寒波が町をなでているので体が震えている。
腐敗政治を弾劾する者達が処刑された以降は、

このようにして事ある度に謀反者が現れては公開処刑にされている。
群衆は慣れきった様子で処刑の成り行きを見守っている。
役人が書状を読みあげを終わった後に、

近くに待機する騎手たちに手をさつと振り合図をする。車裂きの刑とは別名八つ裂きの刑ともいわれる残酷な死刑方法の一つである。

人間の四肢に縄を縛って馬車につなげる。

そして馬車を引く馬が一気に発進して勢い任せに体を引き千切り、右腕・左腕・右足・左足・胴体の五つに体を分解するのだ。

恐怖を与えるために生まれてきたかのようなこの処刑はこの大陸では昔からあるものであり、

宦官たちはそれを民衆への威圧目的で使用しているに過ぎないが、それでも余りあまつて惨い計であることは変わりない。

騎手たちが合図を見て馬車に乗り手綱を持った。

後は役人が処刑執行の合図をするだけである。

事此処にいたって自らの最期を感じたのか、

自分の氣勢を見せ付けるかのように馬元義は叫んだ。

「蒼天の獣達よ！！！！！！！！！！」

彼の叫びに驚いて役人達が彼を振り向いた。

これから体を千切られる男とは思えないほど、

目は狂気と自信で爛々と輝いており、

口元は限りない侮蔑の笑みを浮かべている。

「貴様ら畜生どもをこの手で殺せぬことが残念の極みだわ！！！！！！」

「！！だが我が為さずともいわずれ天が貴様らを食い殺すであろう！！」

「！！せいぜい楽しみに待つておれ！！！！！！！！！！」

男はさも愉快的な気持ちであろう、

洛陽の町全体に響かんばかりの哄笑を洩らした。

手が縛られていなければ腹を抱えて転げまわっていただろう。

男の狂気に満ちた行動に拭い難い恐怖を抱いたのか、

役人が顔を歪めて声を裏返させて命を下す。

「や、やれイイイ!!!」

騎手たちが鞭を強く入れると馬達が嘶いたのちに前へ向かって勢いよく直進する。

勢いをもって千切るのであるから縄は幾分長く、

馬が距離を稼いでいくと巻かれた縄が徐々に引っ張られていく。

馬元義は狂った哄笑を途絶えさせない。

役人が苛苛しながらまだかまだかと馬の走りを見届けている。

ついに馬車がその距離に到達し、

馬元義の体に括られた縄に瞬間的に重圧を加えた。

自らの四肢を強烈な力で引っ張られるのを笑みの中で感じた彼は、

次の瞬間に訪れる圧倒的な衝撃を脳に焼けつけられた。

そして血飛沫が舞う宙を見つめながら天の悟りを開いたかのように想起する。

それが何かをはっきりと知る前に、

彼の意識は雲散霧消して暗い深淵の中へと落ちていった。

「『張角らの賊軍、予想以上に巨大なものなり。よってそなたを遺憾ながら騎都尉に命じるが故、朝敵殲滅に全力を注げ。』、か・・・。自分達が危うくなった瞬間に政敵を頼るとは。誇りのかけらも無い連中ね。」

部屋の主が己の猥欲ことしか知らない無知な宦官に対して嘲る。

次いで自分の中に沸き立つ戦意の昂ぶりを感じ、大陸を巻き込む戦乱に思いを馳せる。

その後、史実どおりに黄巾の乱が始まった。

太平道の教祖である張角は軍事行動計画を事前から用意周到に巡らせていた。

信徒たちは黄色の頭巾をつけ一斉に蜂起し、中原各地に動乱は広がりを見せる。

張角は自ら天公將軍と称し、

張角の弟張宝は地公將軍、

張宝の弟張梁は人公將軍と称した。

天地人をもじったそれは森羅万象の大元である天と地と人が味方であることを印象付ける。

対して靈帝は三月に何進を大將軍として首都防衛の任に当てて、同時に洛陽に至る八つの関に都尉（軍事指揮官）を置き守備を固める。

平行して二次にわたって続けられた党錮の禁を解き、弾圧されていた知識人らが黄巾賊に加わるのを妨げた。

さらに反乱討伐軍司令官として、

北中郎將の盧植に冀州の張角討伐を、左

中郎將の皇甫嵩・右中郎將の朱儁に潁川の黄巾討伐を命じる。

いずれも賊達が大勢集結している場所であり、

確実に鎮圧するために信頼できる武將を遣わしたのであろう。

兵力は皇甫嵩・朱儁ら連合軍が4万。

盧植の冀州討伐軍もほぼ同等であり、腐っても朝廷の力を見せ付ける。

しかし彼らだけがこの乱を治める人物ではない。

不敵な自信に満ち溢れたこの者は他者を圧倒するほどの気を放っていた。

人々から畏敬の対象とされるまでになったこの者は、

既に討伐に向けて自軍に向けて出陣の準備をするように命じてある。

後は報告を待つだけである。

「華琳様、出立の用意が委細整いました。」

この世界には恐ろしく似合わない猫耳フードをした女性が部屋の中へ入ってきて、討伐軍の用意が出来たことを報告した。華琳と呼ばれた少女はそれに目をやる。

「相分かったわ、桂花。では早速行きましょうか。」

「はい華琳様、宦官共の度肝を抜いてやりましょう。」

二人の少女が崩されることの無い自信を醸し出して部屋の外へ出て行く。

前を悠然と歩く少女の目には霸王の威光が、それについてくる少女は前に行く少女に畏敬と陶醉の視線を向けていた。

「ついに、乱世が始まったみたいだね。」

「はい、ご主人様。このような時こそ、どうぞ私の武をお使い下さい。」

「愛紗だけではないのだ！ 鈴々も敵をばったばったと倒せるのだ！」

「あ、私だけ除け者にされてる感じがする！ 私だって頑張るもん、ご主人様！」

雲ひとつ無い快晴の空の下で戦乱の世などを気にも留めず明るく話す四人の構成は、

男子一人に対して女子三人である。

偃月刀を掲げる少女と蛇矛を元氣いっぱい振り回す少女に、華やかな笑顔でその二人の間に入る少女はさながら姉妹のようであり、

三人からご主人様と呼ばれる少年は明るくいつも通り振舞って自分を元氣付けようとする姿に笑みを零す。

四人が乗る馬が先頭となつてその後ろを何十、何百の人間が武器を持ち糧食を持ち旗を掲げて続いていく。

空に翻る刃門旗は十字に交わされた剣の表しているようにみえる。自らの名を一字とつてつけるのが普通であるがこれは例外であるらしい。

自らの出自を表さぬそれは、はたしていわば寄せ集めの義勇軍であり、

この四人の呼びかけを通じて参加を希望した志願兵が占めており、戦意が高く同時に連帯感が高いことが兵達の行進からみてとれる。

義勇軍でありながら中々の練度であるが、

やはりそれは正規軍には劣ることが否めない。

軍の頭脳がいなくては数百の兵など有象無象の蟻の群れ、

敵との戦力差が大きければすぐに蹴散らされることであろう。

それを十全に承知している彼らは、少女の一人の幼馴染である、

幽州太守公孫贇に保護を求めて行軍をしていた。

途中の黄巾賊をまとめて倒さんばかりに進む彼らの行く手は、未だ遮るものが一つもなかった。

賊共に包囲されていることを気にしないかのように夫婦漫才を始め
ている。

その姿は賊共の気を逆撫でするかのようなようであるが、
武器を構えるそれは一寸の油断も隙も見当たらない。

男性の名は辰野仁ノ助、大陸には『遊びの仁』として主に市民や一
部の商人の間で評判になっている男で、飄々とした性格とは裏腹に
完全に任務に全うする冷徹さを持ち合わせており、新人の賊を狩る
ことには定評がある。不運にも周りの賊は彼を知らないようだが。
女性の名は錐琳、真菜を詩花という商家の娘であり、家でのついで
という名目で仁ノ助の無頼旅に一緒についてきている気概さを持つ
女性だ。戟に関しては心得があるようで、賊共を威圧するように時
折戟を振り回す姿は板に付いたものだ。

しかしいかに二人にとっても、

五十近くの賊に周囲を包囲されれば突破は容易には出来ない。
尚且つ、賊共がこちらを生かす気が無いことが丸分りのため、
なんとも面倒極まりなく憂鬱な気がさらに高まる。

仁ノ助は胃がきりきりと痛むことを覚えて、こうなった原因に思い
を巡らせていた。

第二章・空に手を伸ばすこと その巻（後書き）

第二章は黄巾の乱終結までやる予定です。

桂花、かわいいよ桂花。罵倒してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5962x/>

真・恋姫†無双 現代若人の歩み、佇み

2011年10月20日02時04分発行